

諸家宛丸山眞男書簡 十九点

山辺 春彦・金子 元・杉山 亮（編注）

書簡の翻刻にあたって

東京女子大学丸山眞男文庫ではこれまで、丸山眞男が発信した書簡の収集と整理を行ってきました。幸い、丸山の書簡を受信された多くの方々より、その現物または写しをご提供いただくことができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。またその際、丸山文庫顧問の渡辺浩氏、前顧問の平石直昭氏、元顧問の松沢弘陽氏をはじめ、丸山眞男文庫協力の会のみなさまに多大なお力添えを賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、以上の経緯により丸山文庫所蔵となった未公表の丸山眞男発信書簡を翻刻するものです。あわせて、投函されなかった書簡（草稿段階のものも含む）、あるいは宛先不明で返送されたために丸山の手元に残され、丸山文庫所蔵となった未公表の丸山発信書簡も翻刻して紹介します。書簡の草稿に関しては、比較的まとまっており、かつ内容のあるものを収録しました。

丸山文庫では今後も丸山発信書簡の収集に努め、今回のような翻刻

の形で紹介してまいります。関係各位のご理解とご協力のほどをお願い申し上げます。

丸山眞男記念比較思想研究センター長 和田博文

凡例

- 一、書簡の配列は宛先にかかわらず発信年月日順とし、配列順に三桁の書簡番号を付した。
- 二、かなづかいは原文のままとした。促音は小書きで統一した。
- 三、漢字は原則として現行字体を用いた。
- 四、明らかな誤字・脱字は特に断りなく訂正した。
- 五、封筒表・封筒裏など、記述の場所を表示する際は「」（ブラケット）を用いた。
- 六、編者による補足は「」（亀甲括弧）で示した。
- 七、書簡中、編者の判断で省略した箇所がある。

八、本稿の編集にあたり、丸山彰氏、高橋博巳氏、樋口陽一氏、藤田啓介氏（ペリカン社）より貴重なご教示を賜った。また、北彰氏より同氏宛葉書に関する文章をご寄稿いただいた。厚く御礼申し上げます。

〇〇一 生島国雄宛 一九四三年（推定）

国雄さん

随分御無沙汰しました。度々御便りを戴いたのに、いつも／＼御返事をすっぱかしてまったく申訳なく思っております。まるでどっちが慰問されてゐる人だか分らないみたいです。昨日はまた馬上颯爽たる英姿をお送りいただき有り難う御座いました。嘗ての伍長殿も随分エラクになったものだと感心しました。でも、貴兄の元気な活躍ぶりを千万円を尽すよりもっと anschaulich〔具体的〕に知ることが出来て一しほ懐しく感じたことです。こ□上とも折角御自愛下さい。

下って小生は今年はじめての講義に文字通り昼夜を分たぬ悪戦苦闘を続けてゐます。貴兄にお便り出来なかつたのももっぱらそのためと御了承下さい。今は週二回ですが、一回終るとすぐ次回の準備といふ具合で終始追はれ通して外の仕事をする余裕——時間的余裕もさることながら精神的なそれ——が全然ありません。全くこの苦しみは知る人ぞ知るで、学生時代に一刀両断的に講義の悪口を言ってみたことが今更の様に空恐ろしくなります。むしろ自分で満足に出来たと思つた

ことは一度もありません。教室から本と原稿を抱へて研究室に戻つて来る時の気持はいつも惨憺たるものです。ろくに掘り下げられてもゐない、ほとんど思ひ付きの様な僕の考を金科玉条の様に学生が筆記してゐるのを見ると、何ともいひ様のない自己嫌悪の念にかられます。先輩の同僚は、「初めの講義は誰でもそんな気持のするものだ。それでも後から見ると、最初の年の講義が一番充実してるんだよ」などと慰めてくれますが、少くも僕に関する限り、今年の講義が最良だなどといふことは想像することも出来ません。もしさうだったら即座に大学なんか辞めてしまひます。

要するに根本的には僕の勉強が足りないんですから、今更チタバタしてもどうなる事でもなく、ひたすら自分を充実させるよりほかありません。僕も学問の一兵卒として戦場的な真剣さで以て精進したいと思つてゐます。

そんなわけで今年の冬は到々、発哺の雪にシュプールを刻むことも出来ませんでした。天狗の人々にもすっかかり御無沙汰しています。都筑君のおめでたのことは最近石井から聴いたばかりです。後藤君も去年の夏ごろさかにさういふ話が出てゐましたが、どうしたかしら。最々近のビッグ・ニュースは石井の結婚です。この正月ごろから郷里の方で話が始まって、はじめは彼氏例によって色々捻つてゐましたが、元来の印象が非常にいゝらしいので、僕ら友達もワイ／＼とたきつけ、結局十日ほど前に、郷里で挙式した模様です。よろしくエンジヨイしてゐるらしく何にも音沙汰ありません。（以下略）

○本書簡は未完に終わっており、新たに書き直されたか、投函されなかったものと思われる。

○「国雄さん」生島国雄（丸山彰氏のご教示による）。一九四〇年一〇月の竹下由美子宛丸山眞男書簡、八四年一月一六日の津田智子宛丸山眞男書簡、九五年五月二三日の竹下由美子宛丸山眞男書簡に出る「生島」も同一人物か（丸山眞男書簡集「第一巻、みすず書房、二〇〇三年、五頁。同第三巻、みすず書房、二〇〇四年、一八六頁。同第五巻、みすず書房、二〇〇四年、二二二頁」）。

○「はじめての講義」丸山眞男による東京帝国大学法学部「東洋政治思想史」の初講義は、一九四二年一〇月に開始が繰り上げられた一九四三年度に行われたと考えられている。宮村治雄「丸山眞男の初講義」〔UP〕三〇九号、一九九八年七月）および「講義年譜」〔丸山眞男講義録 第七冊、東京大学出版会、一九九八年〕参照。

○「今年の冬は……」丸山は一九四二年二月に発哺へスキー旅行に出かけているため、ここで言われている「今年の冬」は四三年一―二月を指すであろう。したがって本書簡の執筆時期はそれ以後と推定できる。四三年三月六日付家永三郎宛丸山眞男書簡には、「今は一週二回ばかりの講義に終始追はれ通し」とあり、本書簡の記述と興味深い一致が見られる（丸山眞男書簡集「第一巻七頁」。前掲「講義年譜」は丸山の初講義の終了時期を四三年一月とするが、本書簡が示唆するのは、丸山の初講義が四三年一月では終了せず、家永宛書簡が書かれた四三年三月上旬になっても継続されていた可能性である。ちなみに、四三年前半の講義については、五月にも行われており、七月九日までに終了していたことが明らかになっている（平石直昭ほか編注「戦中丸山眞男・小山忠恕書簡 往復 二二点」〔東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター報告〕十四号、二〇一九年、五八―五九頁）。東大法学部における先輩の同僚だった矢部貞治の日記には、四二年一〇月六日条に「政治学開講」、一〇月七日条に「行政学の初講」、四三年三月二日条に「最後の行政学講義。これで当分は休みだ」とある（矢部貞治日記 銀杏の巻、読売新聞社、一九七四年）。さらに、四三年四月一四日条に「行政学の講義」、六月一四日条に「行政学の終講」、六月一七日条に「政治学の終講」、六月二五日条に「政治学の試験を監督」とある。問題は、四二年一〇月から四三年三月までの講義と四三年四月以降の

講義が連続するものであったかどうかであるが、一九八〇年のインタビューでは、初講義に関して「あのころはいまの勘定のし方ですと、みんな六単位で、夏か冬かどっちかが（週）二回、片一方が一回ですね」という質問に対し、丸山は「そうです」と答えている（丸山文庫草稿類資料②①「東京大学法学部百年史丸山眞男先生談話記録 第三回」一六二頁）。この発言が正確であるとすれば、丸山の初講義は四三年七月上旬まで続けられたことになる。なお、戦後の丸山の「東洋政治思想史」講義は、一九四六年度が四六年一〇月一四日から四七年七月一日まで、四七年度は四七年四月一八日から四八年二月二三日まで行われた。

○「都筑君」都筑博（丸山彰氏のご教示による）。前掲一九四〇年一〇月および九五年五月二三日の竹下由美子宛丸山眞男書簡に出る「都築」も同一人物か（丸山眞男書簡集「第一巻五頁。同第五巻二二二頁」）。

○「石井」石井深一郎であろう。丸山眞男「石井深一郎のこと」〔丸山眞男集〕第十二巻所収）および前掲「戦中丸山眞男・小山忠恕書簡 往復 二二点」の第四書簡への注を参照（四七―四八頁）。

○「後藤君」後藤敏雄（京都大学教授。後藤敏雄「木村先生——この不思議な人」〔木村健助先生の追憶〕関西大学法学会、一九八〇年、所収）参照。

○「石井の結婚」一九四三年七月九日消印の小山忠恕宛丸山眞男書簡およびそれに対する注（前掲「戦中丸山眞男・小山忠恕書簡 往復 二二点」五九頁）によれば、石井深一郎は結婚後に妻の伯父に誘われて満州で働くことになり、この小山宛書で「石井は行く」と記されている。本書簡が執筆された時点で石井が満州に行くことが決定していれば、当然そのことに触れるであろうから、本書簡の執筆時期は四三年七月以前と推定できる。

【参考】本書簡には、本文第三段落二行目の「ひたすら自分を」に続く草稿一葉があり、これは後に本文で翻刻したものに差し替えられたと考えられる。参考のため、以下に翻刻する。

「充実させるよりほかありません。いふまでもなく、われ／＼の国家の立たせられてゐる空前の難局は学問にも重大な課題を投げかけてゐます。僕たちが真に国家の期待に沿ふ道は、街頭に立つて大声叱呼することでも、お座なりの時局便乗的言説をまきちらすことでもなく、全身を以て学問に打込み教育

に専念することだけだと思ひます。学者や教育者が自己の職務についての内的確信なく、あつちを見たりこつちを伺つたりして毎日のポーズに苦心してゐるのは見苦しい限りです。僕は自分の学問的非力を痛感すればするほど、傍目もふらずに専攻に精進〔以下欠〕

〇〇二 宛先不明

故郷遙拜の号令朝霧の中にひゞけば胸迫る今朝も
薄
暗き床に襦袢の袖をまさぐりつ綻びを縫ふ初年兵われは
わが能力ためさむ時機と思ひとりて古兵の星を羨しまなくに
劔はた筆もえとらず大いなる歴史の日々をい迎へ送る
病兵らすさびに生けし食卓の野菊もいつか匂はずなりぬ

追記、新学期も始まりましたが、自分の講義が時間表に入つて居りましたら、「当分の間休講」と御揭示下さる様、恐れ入りますが事務室に御連絡御願ひ致します。

○未出葉書。出征中の所感を短歌五首に託したのか。「追記」の内容から東大法学部の関係者に宛てたものと思われる。

○本葉書が書かれたのは、丸山の二度にわたる応召中のことである。「追記」の文面から新学期が始まった頃と考えられ、一九四四年九月か四五年四月のいずれかであろう。

〇〇三 安倍能成宛 一九五一年二月四日（消印）

謹啓、寒気厳しい折柄、先生には益々御健勝の御様子、大慶の至りに存じます。儲、小生このたびの病気に際しまして、凶らずも先生はじめ平和問題談話会有志の方々から御鄭重な御見舞を戴き、御厚志の程、身に沁みて有難く感じました。今月始めからこの療養所に入つて、準軍隊的な規則正しい生活をして居ります。最初は胸廓成形手術まで覚悟しましたが、どうやら気胸療法で済みそうです。にわか環境が激変して、来し方行く末に思いをはせると、さまざまの感慨に胸つまる思ひです。談話会のこと久野（収）さんからいつも情報を伺つて出来るだけ接触を保つて行きたいと思つて居ります。今朝の毎日新聞にのつた先生の談話は断然光つていて他の追従を許しません。ますます困難な情勢になると思いますが、どうぞ声なき何百万何千万の人々の支持を御信じになつて下さい。私も及ばずながらどこまでも先生と共に歩みます。

〔葉書表〕豊島区目白 学習院内

安倍能成先生

中野区江古田三ノ一六二 国立中野療養所 十一舎

丸山眞男

○本葉書は愛媛県生涯学習センター所蔵（安倍能成関係史料〇二一／〇五一）。丸山眞男・吉野源三郎「安倍先生と平和問題談話会」〔世界〕二四九号、一九六六年八月）における丸山の発言によれば、第一高等学校校長時代（一九四〇―四五年）

の安倍と丸山は面識がなく、「ゆっくりお話をした最初」は一九四八年の暮れから翌年の正月にかけてであった。

○丸山は一九五一年一月から九月まで国立中野療養所に入院、医師に胸郭成形手術を勧められるも（人工気胸術療法ではなく）焼灼手術にとどめた。しかし一九五四年に症状が悪化し再び入院、左肺を全摘出することになる（「中野療養所雑感」『丸山眞男集』第十二巻）。

○「平和問題談話会」一九四九年、吉野源三郎の呼びかけに応じた五五人の学者によって結成された平和問題について討議を行う談話会。「三たび平和について」（一九五〇年九月、全四章中第一章と第二章は丸山が執筆）などの声明を発表し、全面講和、中立不可侵、軍事基地提供反対を提言し、社会党や総評などとともに全面講和論の一翼を担った。

○「毎日新聞」に載った談話「一九五一年二月三日付『毎日新聞』一面に掲載。当時の新聞はアメリカからダレス特使が来日したのを受けて、連日、講和条約の交渉を大きく報じていた。安倍能成の談話は日本が集団防衛に参加する必要があると説くダレスの演説に対し、「軍備と戦争を放棄し」た日本としては「米国を中心とした国連軍に一任したい」と述べたものだった。

【参考】一九五一年二月三日付『毎日新聞』一面より

強固な国内体制必要

学習院長 安倍能成氏

ダレス特使の演説はマッカーサー元帥の告示の如くブリリアントではないが、日本に対する好意は十分に認められる。

その要点は、日本に自衛の責任を課することにも、直接侵略に対しては集団防衛への参加を勧告するものである。ダレス氏のいう自衛とは、ほから日本をかき乱す勢力に対して日本人が自ら守るということである。それには日本人が現実の真相を認識して宣伝や威嚇とに乘らず、思い切つて政治と経済とを改革し強固な国際体制を整えようと、警察予備隊を本当に国民の警察として正しくその機能を發揮させねばならない。集団防衛への参加は、軍備と戦争を放棄し、断じて戦わぬと決意した日本として、これを米国を中心とする国連軍に一任したい。日本の軍隊をなくした国連はこれだけのことをする責任と義務とがある。ダレス氏は、強制でなく、招待だといっているが、

招待に応じなかったからといって、オレは知らぬぞとむくれれば、それは強制になる。ダレス氏のいう如く、今日一番有力な制御力は確にアメリカにある。しかし、アメリカが力のみでなく正義と人道によって世界をリードしようと思えば、大事な時には打算を離れ犠牲を恐れず日本から戦争の人的資源を求めようとする自然にして力強い誘惑から脱却せねばならない。かくしてこそアメリカは長く自由世界の指導者として世界と日本とに感謝されるであろう。

〇〇四 北彰宛 一九六八年四月一七日（消印）

あなたの御手紙にたいして、御返事が遅延し、果してあなたの手紙にとどくかどうか疑問ですが、一筆します。一週間も家をあけていると、数十通の手紙がたまり、秘書もなしで公務の余暇にこれをさばくには、ほとんどあなたには想像もつかない時間を要するので、こんな間のびした手紙になりました。あなたが書かれている問題は、手紙でお答えすべくあまりに広汎で、あまりに漠然としております。あらためて都合をきいて下されば、こちらから面会の日時を指定します。さしあたり右まで。

〔葉書表〕〔住所略〕

北彰様

東京都武蔵野市吉祥寺二丁目四四の五

丸山眞男

○「北彰」（一九四八年）中央大学教授。ドイツ文学。著書に『ツェラーンを読む』ということ 詩集『誰でもない者の薔薇』研究と注釈（中央大学人文科学研究所研究叢書、二〇〇六年）など。

○本葉書に関し、北彰氏より次の文章をご寄稿いただいた。

半世紀後に届いた葉書

北 彰

地方から上京し本郷の下宿屋から予備校に通っていた一二月、丸山先生宛てに手紙を書いた。ご返事が貰えないまま翌年三月末にその下宿屋を出た。著名人でありお忙しい方、しかも手紙を書いているのがどこの誰とも知れぬ若者である。ご返事を頂けなかった事に落胆はしたが、それも当然と思っただけだ。

それから五三年が過ぎた。ある日丸山眞男記念比較思想研究センターの山辺春彦さんからご連絡を頂いた。何と私宛の先生の葉書が転居先不明として先生の手許に戻り、それを先生がそのまま保管されていたとのこと。「こんなこともあるのだ！」と大変驚くともいれなかった。半世紀の時間は経ってしまっただけで、確かに先生のお葉書は名宛人に届いたのである。未熟で無知な若者の手紙を無視されずに返事を書かれ、しかも面会まで考えて下さっていたその誠実丁寧な対応ぶりに感銘を受けた。感無量である。

センターで恥ずかしさをこらえて半世紀前の昔の自分と対面した。

未知の人間が不躰にも手紙を差し上げる非礼を詫びながら、「学問と実践」の関係について問うていた。学問と実践を両立することが理想であるが、実践に強い意欲を持っている人間が学問の道に進むことは無理なのか。逆にむしろ実践に対する意欲を学問に対するエネルギーに転化するべきなのか。先生のもとで政治学を学び、戦争と平和、貧困の問題への対処を考えたいと願っているがそれは適切な選択と言えるのだろうか。大要そういう内容である。

「あまりに広汎で漠然としている」観念的な問い。しかし仮にも自分の許で学びたいと言ってきた人間である。対応が義務と先生は考えられたのである。あるいは「実践」に対して強い意欲を持ちながら意識的に「禁欲」し研究生活に集中しておられた先生の思いと通じ合うものがあつたのかも知れない。

センターで、どのようにして名宛人を特定できたのかも知りたかった。センターの金子元さんがネット検索で意外に簡単にあたりを付けられた由。葉書を届けてくださったお二人には感謝である。

○五 緑川亨宛 一九七五年一二月四日

緑川 亨様

一九七五年一二月四日

その後お変わりありませんか。慌しい出発の際は、内藤さん・井上氏に書籍荷造り発送をお煩わせし、また浅見さんには車の手配などしていただき、御配慮有難く存じました。内藤さんはお名前のほうを存じ上げないので、直接御礼を申上げるすがありませんが、書籍も過日無事に到着しましたので、どうかその旨をお伝え下さるよう御願致します。

一昨日妻が到着し、どうやら野中の一軒家(?)の独身生活も一段落ですが、それまでは本当にバタバタした一ヶ月でした。「研究所」の東側に集落のようにあちこちポツポツ建っている所員宿舎は、クルマのあることを当然の前提にしているので、プリンストンの大学には一日数回専用バスが往復していますが、あとは一週二回、何マイルも先の Shopping Center まで、一日一度専用バスが出るだけです。そのかわり散歩する場所は無限にあり、家から研究所まで、一〇分ほどの歩行距離も、どこまでも延びる芝生と、紅葉を落しつくした大樹と、抜けとおるような青空を眺めながら、小川にかかる小さな木橋を二つわたって通っています。四時半すぎには暗くなるので、帰りは懐中電灯で足もとを照しながら歩いてくる始末です。気候は幸いに今年は例外的に冬の到来が遅れましたが、それでも昨日などは、夕方に一歩戸外

に出ると耳もちぎれるような寒風で、ほとんど夏着ですます室内との温度差には、ハーバードの生活で慣れていたつもりでも最初はちよつとまごつきます。

過日こちらへ来てからはじめてニューヨークに出ました。コロンビア大学の小さなグループに話をするためでしたが、エールにいる加藤周一君とのランデヴーの用件もありました。加藤君はもう日本に一時帰国している筈なので、おそらく、私の近況は加藤君からも伝えられることと存じます。一緒に、ニューヨーク・シテイ・バレエを鑑賞し、翌日は、コロンビア大学の近代史の若い助教授のカロルと、その旦那と一緒に、クラウディオ・アラウのリサイタルに行きました。プリンストンからニューヨークまでは車で高速道路を飛ばせば、一時間ちよつとで行けるので、この連中は、メト（ロポリタン歌劇場）のオペラを見て、その足で深夜に帰って来ますが、私はそういうわけに行かぬので、どうしても高いホテルに泊ることになり、そういう点で自然環境の素晴らしさの代償として、ニューヨークのけんらんたる文化生活の恩恵に与るには少々不便な田園住いです。

前回長期滞在したケンブリッジ（ハーバード）でも感じたことですが、良い意味で「閉口」するのは、ニューヨーク・タイムズを毎日読むものにおそろしく時間を喰われることで、そのかわり特に調べなくても、国際・国内政治の話題に事欠きません。C. I. A. と F. B. I. の過去の罪業がつきつきと暴露され、冷戦の論理と心理がいかにアメリカを蝕んだかが今さらのように思い知らされます。自国の反対派

（たとえばマーティン・ルーサー・キング師）だけでなく、カストロからルモンバ首相まで、外国のトップリーダーを、考えられぬほど汚ない手段で抹殺するのがレッキとした国家機関ならば、そのC. I. A. やF. B. I. の足跡をトコトンまで洗い上げる特別調査委員会を設けるのもまた「上院」という由緒ある国家機関である——という両側面の極端を兼備しているのが、アメリカ合衆国という国の恐ろしさでありまた面白さですが、日本人のアメリカ観はどうもその両極を同時にとらえることが苦が手なのではないかという気がします。しかしこんなことに深入りしていると「思想大系」の仕事が一向できずに内藤さんの気を揉ませることになりそうなので、いゝ加減で止めておきます。」 出発前に世話になった安東仁兵衛君の住所が分らぬので、手紙を同封しました。恐縮ながら、急ぎませんから、おついでの折、同君に届けて下さい。なお、〔岩波〕雄二郎さん、吉野〔源三郎〕さんその他の方々にもよろしくお伝え下さい。お元気で。

丸山眞男

〔住所・電話番号略〕

〔封筒表〕MR. T. MIDORIKAWA

TOKYO JAPAN

東京都千代田区一ツ橋二一五―五

岩波書店役員室 緑川亨様

MASAO MARYAMA

97 Einstein Drive Princeton, N. J. 08540, U. S. A.

○「緑川亭」(一九二二—二〇〇九)。七八—九〇年、岩波書店社長。

○「内藤さん」「井上氏」「浅見さん」それぞれ岩波書店社員の内藤俊子、井上一夫、浅見以久子か(『岩波書店八十年』(岩波書店、一九九六年)所載の「一九七八(昭和五三)年末(創業六五年)現在者」による)。

○「研究所」プリンス・トン高等研究所。丸山はこの年の一〇月二六日から翌一九七六年四月まで所員であった。

○「コロンビア大学の小さなグループに話をする」丸山は一九七五年一月二一日にニューヨークで「The Structure of Things Governmental(政事)」と題する原稿で報告を行ったらしい(丸山文庫草稿類資料215、および「Some Aspects of Moral Consciousness in Japan」(倫理意識の「古層」)原稿「解題」)(東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター報告)十号、一四四頁)、参照)。

○「エールにいる加藤周一君」加藤周一は一九七四年九月から一九七六年八月までイェール大学で客員講師をつとめていた(加藤周一年譜「加藤周一の思想・序説 雑種文化論・科学と文学・星董派論争」かもがわ出版、二〇〇五年、所収)。

○「コロンビア大学の近代史の若い助教授のカロル」キャロル・グラックか。一九七五年からコロンビア大学の Assistant Professor をつとめている。

○「クラウディオ・アラウ」チリ出身の著名ピアニスト(一九〇三—一九九二)。

○丸山は一九六一年一〇月から一九六二年六月までハーバード大学の特別客員教授をつとめた。

○「C.I.A.とF.B.I.の過去の罪業」「ウォーターゲート事件究明の過程で、その実態がやや明るみにだされるにつれて、「CIA、FBI」両機関をはじめとする政府の情報収集活動を公に調査する必要があることが政府、議会で認められ、一九七五年一月、副大統領ロックフェラーを委員長とする「合衆国内におけるCIAの活動に対する委員会」(ロックフェラー委員会)が、同月上院にチャーチ委員会を委員長とする「情報活動に関する政府行動調査特別委員会」(チャーチ委員会)が設置された。前者は主に国内でのCIAの非合法活動を調査し、後者は対外活動を調査対象とした。一月に提出されたチャーチ委員会の報告書ではCIAはキューバのカストロ首相とコンゴのルムンバ首相の暗殺計画のほかベトナム、ドミニカ、チリのクーデターに関与していたことが明らかにされた(泉昌一「現代ア

メリカ政治の構造」未來社、一九八五年、一七六、一七七頁)。

○「思想大系」の仕事」「日本思想大系31 山崎闇齋学派」(岩波書店、一九八〇年)の編集作業であろう。

○「安東仁兵衛君」への「手紙」未詳。「丸山眞男書簡集」には収録されていないと思われる。

〇〇六 宮沢誠一宛 一九八〇年六月一五日

御元気のことと存じます。

過般は、「元禄文化の精神構造」の玉稿を御贈りいただき、有難く御礼申し上げます。本来なら一言なりと感想をのべて御挨拶すべきですが、一ヶ月近く風邪に悩まされ、あまり御礼が遅延するのめいかがかと存じ、とりあえず確に拝受という意で一筆申しあげる次第です。いよいよ私の関心対象と御研究が重なって来ましたので、今後の御研鑽の進展が楽しみです。そのうち又、アルスの会合を催して歓談をしたいものです。御自愛を祈ります。

六月十五日

草々

〔葉書表〕〔住所略〕

宮沢誠一様

武蔵野市吉祥寺東町二—四四—五

丸山眞男

○宛先不明で返送。

○「宮沢誠一」(一九四四—二〇一五年)九州国際大学教授。日本近世史。当時は

早稲田大学非常勤講師。

丸山眞男

○「元禄文化の精神構造」松本四郎・山田忠雄編『講座 近世日本史4 元禄 享保期の政治と社会』有斐閣、一九八〇年、所収。

○「アルスの会合」一九六七年九月に八王子の大学セミナーハウスで行われた大学共同セミナーの同窓会。早稲田大学教育学部の学生として参加か。長島幸子「大学共同セミナーの事」『丸山眞男集』第十一巻月報所収、『丸山眞男書簡集』第四巻、みずす書房、二〇〇四年、二二四頁を参照。

〇七 高橋博巳宛 一九八二年二月四日（消印）

拝復 過般は、徂徠に関する御考察二篇と、皆川淇園についての御論考をお贈りいたゞき、御好意感謝に堪えません。もとよりこのような端書で御礼すべき性質のものではありませんが、旧臘から悪性の風邪にかかり、寝正月となつて一両日前にようやく回復したような次第で、あまり御挨拶が出来るのも却つて失礼と存じ、拝受の意味でのみ一筆したような次第です。玉稿は右の事情もあつて、精読には至つておりませんが、小生にはとくに玄光の思想との関係の御指摘について教えられるところ多大でした。ミシェル・フーコーの著ではありませんが「言葉と物」との関係が江戸思想史について洗い直してみる必要を昨今、痛感しております。御自愛をお祈り致します。

〔葉書表〕〔住所略〕

高橋博巳様

武蔵野市吉祥寺東町二一四四―五

○「高橋博巳」（一九四六年―）金城学院大学教授。近世漢文学。著作に『京都藝苑のネットワーク』（ベリかん社、一九八八年）、『江戸のパロック 徂徠学の周辺』（ベリかん社、一九九一年）、『佐賀県近世史料』第九編第二巻「大潮元皓と売茶翁に関する史料」（編集、佐賀県立図書館、二〇一九年）など。

○「徂徠に関する御考察二篇」高橋博巳「徂徠『読荀子』正名篇注釈をめぐつて」（『日本思想史学』一三号、一九八一年九月）、高橋博巳「独庵玄光と荻生徂徠」（『文芸研究』九八号、一九八一年九月）か。

○「皆川淇園についての御論考」高橋博巳「皆川淇園の周辺（一）」（『宮城工業高等専門学校研究紀要』一七号、一九八一年三月）か。

○「玄光」独庵玄光（一六三〇―一九八八）江戸時代前期の曹洞宗の僧。俗名は不明。著述に『護法集』『独庵独語』などがある。曹洞宗復興の先駆者として評価が高い。

〇八 東より子 一九八五年八月二日（消印）

このたびは御玉稿「宣長学における神の實在」をお贈りいたゞき、御好意厚く御礼申し上げます。実は前回にいただいた御論稿の御礼を、住所失念のまま、御礼も差上げないでいたように記憶し、もしそうならば重ね重ねの非礼を深くおわび致します。私も戦時中の宣長の考察について、色々と再考するところがあり、在学中は講義でも触れておりましたが、怠け者でついついそのまま新稿を書いておりません。玉稿をじっくり拝読して御教示に与りたいと存じております。とりあえず一筆御礼とおわびまで。

〔葉書表〕〔住所略〕

東より子様

再出

武蔵野市吉祥寺東町二一四四―五

丸山眞男

○宛先不明で返送。

○「東より子」(一九四七年)下関短期大学教授。著書に『宣長神学の構造 仮構された「神代」(ベリかん社、一九九九年)、『国学の曼陀羅 宣長前後の神典解釈』(ベリかん社、二〇一六年)など。

○「宣長学における神の実在」『季刊 日本思想史』二五号(一九八五年七月)所収。

○「戦時中の宣長の考察」丸山眞男「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」一九四〇年(丸山眞男集)第一巻所収)および「近世日本政治思想における「自然」と「作為」一九四一―四二年(丸山眞男集)第二巻所収)か。

○「講義でも触れておりました」本居宣長については、一九四三年度の初講義のプランでは第三章第三節一でとりあげられる予定となっており(丸山眞男講義録)第一冊、東京大学出版会、一九九八年、二六九頁)、その際のものと思われる原稿も残されている(丸山文庫草稿類資料)。この原稿は戦後も加筆訂正を加えられながら再使用されたが、一九六〇年代に入ると用いられなくなり、新たな原稿が主体となる。平石直昭「解題」(丸山眞男講義録)第七冊、東京大学出版会、一九九八年)三三六―三三八頁参照。

〇〇九 高橋博巳宛 一九八五年九月一九日(消印)

拝復 このたびは玉稿「中根元圭と荻生徂徠」ならびに「明和―天明期の詩と絵画」について、抜刷をお贈りいただき、御好意感謝に堪え

ません。中根元圭については小生知るところまことに鮮く、玉稿によつて多大の教示を得ました。徂徠の「楽律考」についても中国音楽の調性の知識が十分でないために、これまで閉口して来たテーマです。徂徠の楽の理解が、彼の認識範囲をこえて、西洋音楽の和音論に似ていることも面白い問題です。こんな簡単な御礼で失礼ですが、御挨拶がさらに遅延することをおそれ、とりあえず一筆します。御自愛をお祈りします。

〔葉書表〕(住所略)

高橋博巳様

武蔵野市吉祥寺東町二一四四―五

丸山眞男

○「中根元圭と荻生徂徠」『文芸研究』一〇九集(一九八五年五月)所収。

○「明和―天明期の詩と絵画」『宮城工業高等学校研究紀要』二二号(一九八五年二月)所収。

○「中根元圭」(一六六二―一七三三年)江戸時代中期の暦算家。博学多識で、暦算・楽律・漢学の造詣深く、八代將軍徳川吉宗の命を受け『暦算全書』『崇禎暦書』を翻訳した。主な著述に『授時曆図解發揮』『授時曆経俗解』『律製曆』『皇和通曆』『累約拾遺』などがある。

〇一〇 高橋博巳宛 一九八六年四月一日(消印)

拝復 このたびは、「元禄学藝と徂徠学」および「光琳・徂徠・内蔵助」の抜刷をまことに有難くいただきました。小生、昔の肺切除の後遺症

で呼吸不全となり、目下入院中ですので、こんな簡単な御挨拶しかできません。あしからず御諒承下さい。小生ももし天がもうすこし命を与えてくれたら、「新書」の福沢が終ったあと、徂徠にまたとりかかろうと思っております。今後とも御教示下さい。御自愛を祈ります。

草々

〔葉書表〕〔住所略〕

高橋博巳様

武蔵野市吉祥寺東町二―四四―五

丸山眞男

○「元禄学藝と徂徠学」『金城国文』六二号（一九八六年三月）所収。

○「光琳・徂徠・内蔵助」『金城学院大学論集』一一七号（一九八五年三月）所収。

○「昔の肺切除」○三書簡の注を参照。

○「新書」の福沢「丸山眞男『文明論之概略』を読む」下巻（岩波新書）を指すであろう。同書は一九八六年一月二〇日に刊行された。

〇二 高橋博巳宛 一九八六年四月（推定）

前略 このたびは玉稿「元禄学藝と徂徠学」及び「光琳・徂徠・内蔵助」の抜刷をお贈りいただき、御好意有難く御礼申し上げます。小生、一ヶ月ばかり入院し、数日前に帰宅したばかりですので、これからゆっくり拝読させていただきます。光琳については、直接に絵を見る以外に小生は不案内ですので、玉稿について御教示に与りたい、と思っております。御研鑽の一層の進展をお祈り致します。とりあえず一筆御

礼まで。

草々

丸山眞男

〔葉書表〕〔住所略〕

高橋博巳様

武蔵野市吉祥寺東町二―四四―五

丸山眞男

○この葉書の切手部分には消印の日付が押されておらず、波線がわずかに残されている。宛先不明で丸山のもとに返送されたため、封書で送り直したのであろう（高橋博巳氏のご教示にもとづく）。

〇三 五十嵐武士宛 一九八六年七月一六日（消印）

御無沙汰しております。

このたびは御高著『対日講和と冷戦』を御恵贈たまわり、有難く御礼申し上げます。なにより多年にわたる御研究がこうして成果をおさめたことに対し心からお祝い申し上げます。むろん内容については批評の資格はありませんが、おしまいの方に平談会に関してしきに小生がとりあげられているのは、おもはゆい思いがします。しかしジャーナリズムの流行に流されやすいテーマについて、きちんとした学問的態度を貫いておられることに敬意を表します。意を尽しませんが、とりあえず一言御礼まで。

〔葉書表〕〔住所略〕

五十嵐 武士様

武蔵野市吉祥寺東町二一四四一五

丸山眞男

○宛先不明で返送。

○「五十嵐武士」(一九四六―二〇一三年) 東京大学教授。アメリカ政治史。

○「対日講和と冷戦」 東京大学出版会、一九八六年刊。

○「平談会」 平和問題談話会。○三書簡の注を参照。

○三 田尻祐一郎宛 一九八八年六月八日(消印)

前略 過半は「二つの『理』——闇齋学派の普遍感覚」の抜刷をお贈りいただき、まことに有難く存じました。入院などの事故のため、返信の負債が山のように溜り、このように御挨拶ができませんでしたことをおわび申し上げます。こういうハガキではとても立ち入った感想をのべる余裕はありませんが、玉稿は非常に興味深く拝読しました。分析能力の不足を粗雑な思想的断定でカヴァーしているような日本思想史研究者が目につく昨今、「思想」のデリカシーのわかる研究者を見出すことはたのもしい限りです。御研鑽の進展をお祈りいたします。

一言御礼まで

草々

〔葉書表〕(住所略)

田尻祐一郎様

武蔵野市吉祥寺東町二一四四一五

丸山眞男

○「田尻祐一郎」(一九五四年―) 東海大学教授。日本思想史。著書に「山崎闇齋の世界」(ベリかん社・成均館大学校出版部、二〇〇六年)、『荻生徂徠』(明徳出版社、二〇〇八年)など。

○「二つの『理』」 岩波書店『思想』通号七六六号(一九八八年四月号)所収。

○四 高橋博巳宛 一九八九年元旦(消印は九日)

謹んで新年の御慶を申し上げ御尊家の平安をお祈りいたします

日頃は御無沙汰に打過ぎておりますが、小生の健康についてはいろいろ御心配をいただき、恐縮に存じます。昨年初めより熱海伊豆山のマシオンと東京の宅との間を往復するような生活となりました。そのため何かと御迷惑をおかけすることもあろうかと思いますが、何卒御海容のほど願ひ上げます。

一九八九年元旦

武蔵野市吉祥寺東町二一四四一五

丸山眞男

御研鑽の進展をお祈りいたします。

〔葉書表〕(住所略)

高橋博巳様

○最後の一文以外の本文は印刷。

〇五 樋口陽一宛 一九八九年二月二〇日（投函）

御無沙汰しております。

このたびは御新著「自由と国家」をありがたういただきました。まことに時宜をえた御力作と存じます。未だゆつくり拝読する暇を持ちませんが、「結びにかえて」にある、ダラムでの貴兄の質問にはまったく賛成です。発生論と本質論（あるいは普遍的価値論）との混同は実に根強く、とくに「うち」「よそ」意識による裏づけと相俟って、日本で甚だしいようです。こういう偏向にたいして、私は「ヨーロッパの伝統を語る人は、キリスト教が非ヨーロッパ地域に発生したことを全然問題にしない」と語っております。

御自愛をお祈りします。 一筆御礼まで

- 〇「樋口陽一」（一九三四—）東北大学教授、東京大学教授などを経て、二〇〇〇年四月より日本学士院会員。二〇一六年より立命館大学加藤周一文庫顧問。著書に、『近代立憲主義と現代国家』（勁草書房、一九七三年）、「憲法 近代知の復権へ」（平凡社ライブラリー、二〇一三年）、「加藤周一と丸山眞男 日本近代の〈知〉と〈個人〉」（平凡社、二〇一四年）、「抑止力としての憲法 再び立憲主義について」（岩波書店、二〇一七年）など。
- 〇本葉書の一部は、「人生の贈りもの わたしの半生 第九回 憲法学者 樋口陽一」（『朝日新聞』二〇一六年九月三日付）で紹介された。
- 〇「自由と国家」 樋口陽一「自由と国家 いま「憲法」のもつ意味」（『岩波新書』一九八九年）。
- 〇「ダラムでの貴兄の質問」 一九八九年九月にアメリカのダラムで開催されたシ

ンポジウム「五十年目にむけての日本国憲法」での樋口の質問を指す。同シンポジウムでなされたJ・E・アウアーの報告「日本国憲法第九条——戦力の「永久」放棄から世界第三位の防衛予算へ」に対して樋口は、次のように質問した。「いま日本で「西側」との軍事提携の強化を唱えているひとびとは、実は「西側」文明の基本価値である人権にかかわる問題については、系統的に無関心——さらには敵対的——な態度をとっているひとびとであり、……しかも、そのようなひとびとは、「もう外国から学ぶべきものはない」と主張するひとびととはほぼ一致している。あの一九三〇年代に、宮中・財界・海軍の首脳部が親・西欧——特に親・アングロサクソン——だったにもかかわらず、簡単に、排外的軍国主義の流れにおし流されたこととくらべると、いまのほうが一層あぶないとすらいえる。あなた自身の賛否は別として、そのような見方がありうることを、アメリカのリーダーたちは承知したうえで政策決定や世論形成にあたっているのだろうか」（前掲「自由と国家」二二—二二三頁）。

〇六 松尾尊兌宛 一九八九年二月

拝復

御無沙汰しております。このたびは「石語」を御恵与^②たまわり、何と御礼申し上げてよいか、言葉もありません。稀覯本ですので、実質なりともお支払いすべきで、額をおしらせ下されれば幸甚に存じます。そうしても、私にとつてはたいへん有難いのですから……。

なお、追伸の件について私の知っているかぎり、御返答申し上げます。一八八頁の私がいう森戸・河上論争は、まちがいに瀧川事件後のことです。河上事件のときは私は中学生で多くを知りませんでしたし

た。河上事件のときも、森戸さんは大学自由論を書いたように思いますが、瀧川事件のあとの森戸さんの論文が直接のキッカケであったことは、私が大学生であったのでよく覚えております。経友会の講演会で超満員であったのは、この論争が学生に新鮮な印象だったからで、殊に講演のなかでも、森戸さんは大学の自由を経済学の「限界効用説」の比喩で説明しました。

つまり「第一段はマルクス主義の研究をするのはよいが、実践をしてはならぬ、だったのが、次の段階ではマルクス主義の研究発表が危険ということになる。さらに最近の段階になると、自由主義論の発表が危険ということになって来た。限界効用の移動だ」といわれて、聴き手の私はうまい比喩だな、と思いました。河上さんは攻撃派も擁護派もマルクス主義者だということを前提にしておりましたが、瀧川〔幸辰〕教授の場合は、マルクス主義者だといっているのは文部当局だけであって、擁護派は法学部教授も、京大学生も、またジャーナリズム世論も、瀧川の論説はマルクス主義でも何でもない、自由主義的立場を出でない、ということに一致しておりました。だからこそ森戸さんもさきのような所論をのべたのだと思います。むしろ総合雑誌の森戸・河合論争では、大学の内部でどこまでマルクス主義の自由が許されるか、が論点になり、河合さんの立場は、大森義太郎氏（河合氏の弟子）を例にあげて、「自分の方から辞めると言ってきた」というので、今度は大森・河合論争になりました。一般論としては、マルクス主義の研究は自由だが、大学教授が実践をするのは限界をこえている、と

というのが河合さんの立場でした。しかし当該の講演会は時期からいって、京大事件と天皇機関説とが直接の背景になっていたことは私の直接経験からして確かと思われまます。

第一の方の京大事件についての、小野塚先生のやり方については学兄の「疑い」は正当と存じます。それは「回顧録」では直接に出ておりませんが、南原先生が書かれた「小野塚喜平次伝」では一七四頁―一七五頁で、やや漠然とながら表現されております。「滝川事件が東大に波及しようとしたのを食い止める」ために、文部大臣および齋藤〔実〕首相に行った進言は「(イ)東大は京大に呼応して立たないから、その代り、「教学局」にある東大教授のリストをひっこめること、(ロ)京大法学部の閉鎖は不当であり、東大はその責任を負えないから、京大学生の受容は引受けなさい」という内容だった、ように推測されます。これも当時の状況からすれば、「抵抗」にはちがいがありませんが、小野塚個人の問題としてでなくいえば、東大が京大を見殺しにしたことは否定すべくもないでしょう。なお京大事件の翌年（一九三四年）の緑会大会では皮肉にも、来賓として鳩山一郎と小野塚喜平次が同席し、小野塚先生（すでに総長ではありません）はスピーチで鳩山氏を指さし「今では立派なことを言っているが、あのときはね、相当なもんでしたよ」と言って満場をドッと笑わせたのを覚えております。（鳩山氏は苦い顔をしていました）以上、お役にも立たぬことをお便りのついでに述べましたが、重ねて御厚意に厚く御礼申し上げます。

一九八九年師走

丸山眞男

松尾尊亮様

御机下

○「石語」 大阪朝日新聞京都版の読者寄稿欄をまとめた本。政経書院、一九三五年刊、丸山文庫資料番号015820。丸山鐵雄が投稿した、軍歌「战友」の歌詞をもじって京大事件を風刺した歌が掲載されている（一九三三年九月二日付）。

○「一八八頁の……」 「河上」は河合（栄治郎）の誤記か。丸山眞男・福田欽一編『聞き書 南原繁回顧録』（東京大学出版会、一九八九年）一八八頁に、「昭和十年だったと思いますが、森戸辰男先生が京大の滝川事件に関連して『大学の転落』という論文を書かれ、河合先生がそれを反駁するという森戸・河合論争があったのですね」という丸山の発言がある。ただし、一九三三年の滝川事件（京大事件）後に森戸辰男が執筆した論文は「大学の顛落」の新段階」（『中央公論』一九三三年七月号）で、河合栄治郎がこれに反駁した文章は確認することができなかった。

○「河上事件」 一九二八年に三・一五事件の影響で京都帝国大学教授であった河上肇が辞職した事件を指すであろう。このとき丸山は中学生だった。

○「河上事件のときも、森戸さんは大学自由論を書いた」 河上の辞職を受けて、森戸辰男は一九二九年六月に講演を行い、それをもとに執筆した「大学の顛落」を『改造』一九二九年九月号に掲載した。

○「瀧川事件のあとの森戸さんの論文」 前掲森戸「大学の顛落」の新段階」である。

○「経友会の講演会」 一九三五年一〇月九日、森戸辰男は東京帝国大学経済学部の親睦組織である経友会の招きに応じ、「教学の刷新と大学の自由」という題で講演を行った。『聞き書 南原繁回顧録』一八八頁に、前引の文章に続いて、「それで東大経済学部の自治会（経友会）の学生たちが森戸先生を招いて講演会を開いた。もちろん、河合先生の許可をえて、河合先生も出席されていた。二十五番教室が一杯になるほど盛会で、森戸さんはきびしく河合さんの大学自由論を批判しました」という丸山の発言がある。この講演の「手控」をもとに執筆された森戸辰男「教学刷新と大学の自由」（『中央公論』一九三五年一二月号）を見る限り、河合への言及は限定的である。この論文で河合は、河上事件を受けても大学の自由と自治が失

われないという立場をとった「非顛落説」の最も有力な提唱者と位置づけられているが、それは「かつて」のこととされており、滝川事件や天皇機関説事件のよきな自由主義学説への弾圧が起きた後においては、こうした「非顛落説」はその主張者自身によってさえ事実上否定されたようである、と述べられている。

○「大森・河合論争」 東京帝国大学助教授・大森義太郎が辞職したのは一九二八年四月のことで、河上肇と同じく三・一五事件の影響によるものだったが、河合はこのとき大森の辞職を阻止しようとして運動している。その後大森は、『文芸春秋』一九二九年九月号に執筆した「当世書生氣質（六）」で、授業で使用する教科書の選定をめぐる経済学部教授会で行われた議論を暴露した。河合はこれに対し、「嫌悪すべき学会の一傾向」（『改造』一九二九年一〇月号）を執筆して批判している。そして、森戸が「大学の運命と使命」（『帝国大学新聞』一九二九年一〇月一四日号）で河合のこの論文と「大学における自由主義の使命」（『改造』一九二八年六月号）に言及したことから、森戸と河合の間で論争が行われた。さらにその後、河合は大森辞職の経緯について触れた「大学の自由とは何か」（『中央公論』一九三〇年一二月号）を公にしたが、これが森戸だけでなく大森の反論を招くこととなった（大森「保守主義と自由主義との限界」『経済往来』一九三二年八月号）。河合と大森らマルクス主義者との間で自由主義をめぐる本格的な論争が行われるのは三五年七月以降のことだが、これには森戸は参加していない。

○「学兄の「疑い」」 未詳。松尾尊亮「非常時下の知識人——京大瀧川事件の場合」（藤原彰・今井清一編『十五年戦争史一 満州事変』青木書店、一九八八年）で述べられた、小野塚と鳩山一郎文部大臣が本文後述(4)に相当する「密約」を結んだという説を指すか（一八二—一八三頁）。なお、丸山は同論文を読んでいた。『丸山眞男書簡集』第四卷八三頁。

○「小野塚喜平次伝」 南原繁・巖山政道・矢部貞治「小野塚喜平次 人と業績」（岩波書店、一九六三年、丸山文庫資料番号0180508）。

○「緑会大会」 東京帝国大学法学部の親睦組織である緑会が年一回開催する大園遊会のこと。丸山が言及する一九三四年の大会は一〇月一日に開催された（『緑会記事』『緑会雑誌』第六号、一九三四年、二二六—二二七頁）。

〇七 高橋博巳宛 一九九〇年二月一日（消印）

拝復 過般は「独庵玄光の詩文」と月儼とについての玉稿をいただき、厚く御礼申し上げます。私の熱海と東京との二重生活のため、また十月からのひきつづく身辺の事情に忙殺されたため、今日まで御挨拶が遅延いたしましたことにはたいし、御海容願ひ上げます。玄光も月儼も私にはまったく不勉強の人物であり、玉稿からは学ぶことばかりです。一層の御研鑽の進展をお祈り申し上げます。重ねて御礼と御わびまで。

草々

〔葉書表〕（住所略）

高橋博巳様

武蔵野市吉祥寺東町二―四四―五

丸山眞男

〇「独庵玄光の詩文」『東海近世』三号（一九九〇年五月）所収。

〇「月儼とについての玉稿」『詩中の画人―月儼』『江戸文学』一卷三号（一九九〇年六月）。

〇「月儼」（げっせん、一七四一―一八〇九年）江戸時代中・後期の画僧。スピードに乗った湯筆を駆使して、独特な群像表現や山水図を試みた。著書に『列仙図賛』がある。

〇八 牛岡義一宛 一九九一年一〇月四日（消印）

拝復、あなたの受とり方は、流通するレッテルで人を判断して、ロクに著書自体をよまない、現代の頹廢を象徴しています。無数の反証を示しても、どうせ読まれないでしょうが、せめて一つだけ、「スターリン批判の批判」（現代政治の思想と行動）とくにその追記をよく読んで下さい。あなたに理解できるかは保証のかぎりではありません。もっと、最近には、（このごろ時論は健康上、書きませんが）「現代の理論」最終刊号（一九八九年十二月）のアンケートを！これ以上はお答えしません。ただし、資本主義万々才でないことはやがて分るでしょう。

〔葉書表〕（住所略）

牛岡義一様

武蔵野市吉祥寺東町二―四四―五

丸山眞男

〇宛先不明で返送。コミュニニズムが犯した数々の罪悪が明らかになるにつれて、丸山がファシズムよりコミュニニズムに共感を覚えると明言した誤りが指摘されるであろうとした上で、これまでの著書を絶版にして自己批判の書を上梓せよとした葉書に対する返信。

〇「牛岡義一」未詳。

〇「スターリン批判の批判」初出は『世界』一九五六年一月月号に「スターリン批判」の批判―若干のイデオロギー的検討―の名で掲載。一九五七年三月に「スターリン批判」における政治の論理」と改題のうえ『現代政治の思想と行動』下巻に追記とあわせて収録（のちに本編は『丸山眞男集』第六巻、追記は第七巻所収）。

〇「現代の理論」最終刊号のアンケート」『丸山眞男集』第十五巻に「休刊号に寄

せて」の名で収録。

〇二九 五十嵐武士宛 一九九二年二月一日（消印）

御無沙汰しております。

このたびは御高著『政策革新の政治学』をお贈りいただき、御好意厚く御礼申し上げます。

クリントン勝利でアメリカへの関心が新たになりつゝある今日、ここにいたる過程を明らかにしている研究として、本書の意義少からぬものがあると存じ、拝読を楽しみにしております。一筆御挨拶まで御自愛をお祈りいたします。 草々

〔葉書表〕〔住所略〕

五十嵐武士様

武蔵野市吉祥寺東町二―四四―五

丸山眞男

○宛先不明で返送。

○『政策革新の政治学』 東京大学出版会、一九九二年刊。